

## 第16回 日本がん・生殖学会 学術集会

看護・薬剤師・心理士部門・サイコソーシャルケア委員会合同セッション

奈良, 2026.2.21-22

がん治療後の岐路・その後の人生を考える時—心理士の立場から

橋本知子 1, 中西佳与 1, 中岡義晴 1, 森本義晴 2

IIVF なんばクリニック 2HORAC グランフロント大阪クリニック

がん罹患することはその後の人生に大きな影響を与える。さらにはがん治療は妊孕性に影響を及ぼす可能性がある。妊孕性に影響を及ぼす可能性があることがわかった時、治療前に妊孕性温存の選択肢はあったのか、なかったのか。妊孕性温存の選択肢があった場合、それを希望したのか、しなかったのか。希望した場合、温存できたのか、できなかったのか。温存できた場合、がん治療終了後に、妊娠・出産を試みるライフステージに到達できそうなのか。そして妊娠を試みた場合、挙児を得ることはできたのか。妊孕性温存という側面から見ただけでも、分岐の枝葉が多々ある。そもそもがんという病は、その治療と向き合うだけでも個々に特性があり、予後も多様である。がん患者の治療後の岐路、その後の人生を考える際の支援は、患者の多様性を知り、それに向き合うことから始まる。

当院は生殖医療施設である。当院に来院されるのはがん治療開始に先立って、妊孕性喪失の可能性があること、温存の選択肢があったうえで、さらにそれを検討することを希望された方という、患者全体からみればごく一部の限られた方々であることをまず念頭においておかねばならない。妊孕性温存を実施されたのち、がん治療後に戻ってきて生殖医療を利用されたのは、さらにその一部である。

不妊治療のゴールは、挙児を得ることである。その同じゴールを目指す状況下におかれた方においても、心理カウンセリングに来談される方の背景、その後の人生は多様である。その多様性に対応する必要性が近年重要視されてきており、生殖医療施設においては心理カウンセリ

ングの提供が推奨されている。また、不妊治療における心理カウンセリングが一般的になりつつあることで、治療開始前、治療中の心理支援は当然ながら、時に長期間に渡っての心理支援が必要となることが知られてきている。実際、不妊治療を受ける患者全体の数からみれば少数であるが、生殖補助医療施設における心理カウンセリングにおいては、不妊治療終了後の人生の歩みを支えていくことも一定のウェイトを占めている。

もとより妊孕性温存治療においては、挙児を得ることはゴールの一つではあるがそれだけがゴールではない。がんの治療過程の変化により挙児希望のあり方は変わり、さらに多様性を増していく。本シンポジウムでは、当院の妊孕性温存の現状を報告するとともに、がんという病気を抱えた患者の治療後の多様な人生における心理社会的支援のあり方について、不妊治療患者の心理支援との相違を踏まえて模索したい。